花鳥日記

ル 4
4872

鹿島日記序

文書和邪波。原漢國尓麻禰比之那連
杼。物語書登。旅能日記止乃二種波。此
國紋中々勝禮多留。曽波光源氏尓水
滸傳乎合世。土左日記尓来南録乎合世
試婆。施耐奄我詞紫式部尓劣利亭
蝌我筆。紀朝臣尓及婆邪留古。止。自

小澤醉園火後蔵書

4873

38- 4649

知良流便〻。然而旅乃尓記波。具止
具〻逢止阿遣留事乎。然長柄記止
杼年禮婆。伊登後尓成天讀耐
母。當時乃阿利左万覺江。人乃上長
柄。己行巡禮留心地世良〻母能
奈理計利。然禮杼。大方波後尓
物世之我多久足。道行振尓書出

之波。最稀奈流波。詞遣能美雅比
多連杼。事實乃誤礼流尓天。推量
良禮奴。我松能舍乃于斯。旅乃日記
伊登多加利。所謂築井日記。相馬
日記。吉野日記。玉川日記。曽我日記。鹿
島日記。衣手日記。是奈理。其波必道
由久日〻尓記之。駐良禮多連婆。露

許毋誤連留布志奈々。其我上尓。
花尓紅尓詞乃文乎朱之金乃玉乃
光有奈留波古仁毋今仁毋。類少之
登也伊波牟。相馬日記波早久北條
某標注加皿天板仁鏤吉奴。此多美
弟子達議利弖陸續所木尓物世
牟止須。先鹿島日記乎許曽止

天孝訂左連之波。吾學友瀧山氏
尓奈武。文政五年七月。長谷川
宣昭序。

秦具馨書

幸谷川ありし能秋のすゑつかた松乃舎此
大人にさぞはれまゐりて大船乃かとりの浦
あるは遠き海路のしほに漕なみぞひく常陸
の國みずさへゆかしく見ぬ世経たまふなし里
乃にし記國の傳へ来の名をのみやはなき
の庵へ歸るさまのことしも今かさ敬崇
松作をかしき事ともある書あるたぐひにぞ
みつゝ此歌も巻くべきまちわたれ奉る

なかにも萬葉集はことにひと巻により
紀行まかる所をみ海へ越路のまゝ書
給へしことゝも新にかきしるし、ゐの人々志ゆて
いましむくはし櫻木にうつりのほるよしとかふ
なかりぬ大人擬古のむさゝおもしくはふく
年經て神もの思ひなされ枝をひ栞をそへ
白川家にむかしに志なかりしは和歌
乃里にあるこさあとをまつ孫首家林の
木下ゆみにたどのあるに棠井山より豫望
をみゆく玉河のへ月などもてはやされ
らく年經く竹日記とも聞えあなたへるも
またる歌をまうのつきたし清さくに
春ふひろこそやかならひあまりぬ大いに学
梳櫛擬く年經の古今さかれてまかへ
志のなかになくしてさとも文政五
をとりにもしの文月年に末川 ふて

唐国の露めつらう菊の裡ひと露山おき之
志らぬ来

抑此日記ハ清く古に露もかゝれに清さるやうなくて何れ
まうそのさとをかしく記さるにまとの何るハ世れ品をいあらし
猶只まことの事ハ志るしなれと文法ちなくて一えなりのみにて
自のいとたへか菊ぶハ中れ了解と浅てしさて文ハいみしく云
何りまれ其れ記にそしとおもふ記ハ下とも了え此了れに見ん
何中ゆるかゝ後ハおもれいかつ世中ニ此をいためゆるとしれ
おくれおる趣も此をゆまあらに其れよとせらるへくし
抑おこそとまれれハらしれ後ハ猶ほしとまさへおもひて文

らましくせんとが為へなるいはをとこれるがうへに人をさへ
なほむくさまざれになん有し連は人すへ会の翁はやゝ頭ならし
ふみをけられし荒呼は記をさへ支磯山はなし
みなりなりひて世になくせらるをとをみなりなりひてみる
にそれ地理のうにまれ何にまれいさゝめにも倚をといをれます
して文さへ世に心にかゝれけるれなるは杉風井泉さこめ
せも上れ去れとやいりんさるは翁書翰麻をより海上
かけて見めくらるをなしめすゝ杉みかむくれ奄に杖をと

とゞめれなれは清くくとそれなりさ油をと見しすなりせしに桧
硯と東みしらん記翁とをとれなれどみるなりなくすをを□かゞ
よりれかいしるされしかどこれぞまことれね記といふべき記かれ
いはなりやされるなりそひをなすはくにてへいさんてれかいてや
これ翁れ和学れなれ世にはゞかれなるすをすくにてず世に又
儒典の家とい実にて聖のをしへ佛の法にともに拵られし
ひろくみやまひて大やまとれそれなれけにはかなりなる
なけゝらひいさしにより用ひられねどそれ行しそれしをゝ

鹿やとりのむしくのまにありてふ家をとハいにしへよりいひつたへ
しるしとめの傳まざにまつけれかれなる日記なれハまことに
うしれつれざるハむべなりけり翁もやくふしころの大人にゐ
とひきゝして家ゝ学びのみちのみをきんに衛山のおもき書
にゐきれるどちなれバこゝひ枝にあつめられて名におふ和の子
とものまねびつゝへられんことをいとよろこびしく古ゞみなる口に
きゝものともれてむしはかれにひとことをバ人のみやるになん

文政五年七月二十五日

浮近山頴

鹿嶋日記

高田與清稿

鹿嶋まうでのおもひたちて。文政三とせといふとしの七月のなぬかの日かど出して坂本箕輪金杉などを経て千住の宿に到る。千住といふは千手のなまりにて。千手観音の堂ありけんにおこれる名なりや。出羽国天童城の根小屋に千手堂といふ所あるよし。それもおなじことなるべし。合戦の書にみゆ。さておりろを右ざまへとりて小菅の里をとほりて。かやせ河の橋を渡れバ亀割の里なり。ひだりての弓とる方ハ渕江領といひ。馬手の方ハ葛西領といふ。とほくみゆるハさるかたなれど雨後出て田面をりなひわたれバ物のあやめもさだかならず。中川のほとりをすぎれば新宿のむまやなり。雨ちなほ降まさりていとまづしかし。金町ハ太井

川の川ぞひの里なり。そこの関をこえ。まへしを渡りて。舟よりおるる
れバ下総國葛餝郡松戸のしゆくなり。馬橋といふ里に慈雲閣万満寺
といふ大寺あり。霊験あらたなる金剛神おはせたまふ。小金の宿にいたれ
るころほひ。雨にこうじてくるしければ。日高けれどやどりぬ。そも／＼
たび道のほどなにくれのうきめ多かる中に。雨の日ばかりわびし
きはなし。されど

法ちくれもやぶらぬ侍代の雨のみちくすまといふでゆきれ
づむべき」と。さぞ思ひていはまし。我もしかし雨やまぬ。
よもすがらねざめにたゆまでむまやぢのしのやにふる
しぐれかな

八日。朔より大雨風ふりふでおて。道行べくもあらねバとゞまりぬ。

今日の雨風のさわ。家をとこぼし。垣をたふし。木をぬき。いさごをと
ばして。おそましさなゝかなりし。後の世までも言ぐさに
いひ出べきほどなりにけん。

九日。ていけよく晴ぬ。小金のやどりをたち出るに。大なる木の風にふき
たふされ。根をさゝげてよこたはれるがおほかれども。道などいとむつかし。
小金の牧に馬どもおほかしこにむれゐる。はた草くひたるさま。いと興
あり。此牧はかまが谷。大和田。千葉などにはじまりて。きはみなくひろし。大
まかなり。馬はおほかたが中に臙脂鹿毛とて。いとあやしくくしびなる
あり。牧長などいかでとらへむとはかれど。捕ゆるかしこき神なりとぞ。こ
の辺のさゝふが中にさゝぐりおほく実のりたるをみて
さゝぐりのいがまじりなるさゝふをばくひはさむば馬のなく

ちかし。柏といふさとにて手賀沼をみる。此沼ハむかし六浦ぢさきのおや高田友清のはりそめ。いそしみて二万石ばかりの新田なりけり。そだまつる所なり我孫子の宿より一里ばかりゆきて刀根川のべにいづ。

かたへにハさしてくだり此方にハみをひきのぼる利根の川舟。

川ばゞいとひろくて。海などみたるこゝちせり。舟をおりてゆかずしゆけば取手の宿なり。澤近嶺が家をとぶらへるは。年ごろちぎれるこゝろなるべし。家ほどハまがきのにしきの大人村田春海翁のをしへごにて心つくしておも友なりけるほどもなりしがよみて出せるせどうか

記のよまでけふハおすさまの神にいのりて小栗さし家ふぞまちしまつのやのなみ」井堀の大堀といふ所にはじめる寺田徳基とぶらひまうでく。徳基ハ刀根川の舟めぐらしするうけたまはれる人なり。ぞやく三縄維直にまなびてからうたつくるみやびに心をよせり。維直ハ江戸の矢の倉にすみし詩人にて号を桂林といへり。家にいりて先孫氏のその木の巻。積徳叢談などのかうぜちせり。

十日。晴。徳基をくして。いとうるはしき石坂をのぼりて。大鹿山長禅寺にまうづ。これさま利根川に臨て西南のかたなるに二るせのふねのみさけられける。えもいひがたし。寺ハ妙心寺流の禅宗にて。文暦といふ年の頃織部時平といふ人。家を施して建けるとなん。時平が法名をもてしかる位牌に大悲院殿花輪平公大禅定門とみ

ゆ。此里ハ昔大鹿左衛門某が住し砦の跡なりとぞ。さてハ林麓なる取手の宿ハこれによれる名なるべし。今日ハ寺田まで行んとて。ふるく伝はれる文書などみんとしけれど。いとほいなし。ちかどなりに大岩村あり取手の宿より東につゞきたり。ふるき名ハあれにていひけん。今だいゆくとよぶハ取手よりやゝはなれにある宿なればともなるべし。さるくて平なるをおりひしといひ。首てハずひよといふとぞ。湯て墓めぐりし。已に相馬のまさにいへるがごとし。村長寺田真五郎名清が家をとぶらふ。

名にしおへバ子孫もかくて物さびのふかりやみの寺田のるらん。ゆゑしハよろくまざに心よせふりし。それより寺田といふハいまし。定額のきによせられし寺田より里の名によびそてそこにとめる人の族の名にはよりちなみしなりけるじがよめる。

このやどの木かげさびしく宵られ月はえなるおもみをまちえて。余がかへし。

木かげにはさゆるで月のひむやどにつゞきれ葉やさまたげハやせん。叙よりて積徳叢談。墓相或向などのとぎきゝし。近嶺がよめる。

よし何しげきをとゞるとぞれにこゝろのとまるよしぞおほかる。徳基かさねしくらむ。向ちかど近き者陸のくらの駒馬の里に甚七といふ下衆男あり当ハ五十あまりなるべし。その男銭祠土器さいで。ふるきうれ。古履。古屁切。ふる草嚢などやうの物をとくちんるにいとよくくひぬ。くひをはりて後。酒一杯むかうかまれみてさしぬおもむちまなり。酒のむことを許さねバ。さるもの又身いとかろくて。

唐箕といふ風出す車の。たかさは四尺ばかりなるを。やはく彼方此方
ちに飛こゆといへり。はるだかなりけらしげなることまり吾孫子の
はくれ運平とて五十あまりの男なり。ひと日に四十里の道ゆく。ゆゑに異名と
なして四十里男とよぶ。ある日水戸に行かへり来て。やがて江戸にゆきた。
日ならずしてかへりて馬草一荷刈ることあり。その道を許に六十里餘なりと
いへり。これいづくまでも知られたる物語にあらず。
十一日照。近嶺真などぐして大堀ざまへゆく。徳基の志るべせり。西野
といふ所は刀根川の河原にて。芦薄しげく生しげりたれば。前に
すゝめる人。後になりたる人。かたみに呼ばふをみれば。からうじて
大堀の里にいづ。こゝは井野新田なり。井野村は宿の東北の方に
ほどちかくて。そこなる城の内。堀の内屋敷などいふ坪字あれば。ふるき
城の跡なるべし。また花輪臺といふ所あり。織部時平が法名を花
輪禅定門といひしとかよひ合ふるに。時平がすみ所なりけんまたあり
かたし。またまたいふべし。埴輪つくりけん所にて。羽尾花井なども其は
しいへる地名にや。または鼻尾。鼻井の義にてもあるべし。鼻は山のさし出
たる所といふ。武隈のさなさの松なども其は鼻邊の郷名にて。山
の鼻の邊のことなり。めでに塙とかきて。假名を埴輪とはおなじかるべし。徳
基が家。前は刀根川をのぞみて。うしろに林あり。梢は落葉して。下は
きえた種に出ありさまざまの小鳥ねに鳴わたりして。すだくなくあはれ
なるものはかゝる所の秋なりけり。徳基が父長経もかしやましまして
のめるみやびとなり。夜にいりて月前川の水にうつれり。
此ころせば秋のよそのかげはのみてなぐひもなくなみにうつる

月かな。この家を臨江亭といへばなるべし。長経がかへし

そこにすむとねの川おもてにはへばみなそこにもとむる月か
やどしつ。こよひの月のくまなく影をさぐりて我すむ。余ハ窓月。
家をうつし猜かはしきて月かげによひをあかしてゆかべう
れしさ。

十二日照。千蔵が家の名ハ織錦のかたの月舎とおほせるまま
ことがきをなんいなしとて。おのれよいふでとくぶれバ月舎の記を
えらぶ。真ことの家の名を竹堂とおほせ。それと云してかくて徳基
とひらく。此里のはかむきひには。ゆりを中峠とかきてなるびやよぶ
村あり。またその村の名ならとへ。余ことへいらく。相模国文行郡に
枇杷村とふあり。それハ嶺はるかなり。嶺ハ山上の平なるをいへで。山を
よう下る心にて峠の字ハ作りたなるべし。されど詞の上ハちまたの
神にぬさまむる手向る処にてたむけなるを。音の便のまにいひう
なして節用集などにハ到下とも書なりさて枇杷ハ横の音を無にせ
しでびやとよみべきをびやうと聞ていふとよみ。中峠村ハ峠によよ
り名を得て。さる心の字を書るにや。などことをまうしかどに日かかぶ
れにければ。相ひくにも千蔵が家にかへる。古今真楫。笠川儀雄。深野夏
浦。斎藤周氏などとも集めていくつか語まじうでく今宵の
日本書紀積徳叢談などのよたどん。

十三日。朝明。にさけくもり。今宵の月ハ寛平のみかどたちおめでめで
まししより。菊月の望の夜になべて。秋の二夜と名にあふなれバ。
利根川に舟うけてあそやさまほしと。長経。徳基まうけせり。その

時雨けり。臣成とともに大堀ざまへゆくに。これなどより雨ふり出て。
大堀に到れるころハいみじうふりまさるに。あるじもまらうども
いとすさまじげなり。さて〳〵九月十三夜雨とふる心のあやむ。余
はじめより月みんものと待つけしひもゆふしぐれふり出
にけり。長経

長月の月もきやとやつしてし影にかくれしきさ雨そ
そぞろなる。徳基

まちまちしかひもしぐるとながめはし長月の夜にまちぬは
かしけり。近嶺

はげはまた又のこよひも月に称ひしやしぐれなぞそ
くらむ

十四日。己打さがるころ雨晴ぬ。長経が濤齋の記ともかきてはなれて。
十五日晴。今日ハ鹿島ざまへと心ざしてまかれとどつぐ。近嶺

おもかげにまづなむけしきいはまくへをふみてぞわするはかり
ことむ」余がかへし。

かし満をいそぐまだれにとりもはへぬぬさにかくてんこそ
こともし」。徳基が家の舟にて刀祢川をくだる。布川。龍が崎。布佐。竹
袋。木おろし。安食。田川。倚川などいふ里。ひだりはみななれ岸にみゆ。
日のくれに舟をおりて。源そは岸なる椿子稔五源が家にとまる。こ
八香取郡猿山村なり。大堀よりこれ里まで河道七里になむあれりと
ぞ。近郷なる藤原綾留儀八をとぶらひく。
おぐるより刀祢の川なみおもひえがみしかやまし

千世君。余がかへし。

　おもひえぬ浪間のかげの秋ふかくこゝろにそむやこれの言

の葉。千稔がよめる。

　山がつの麻の衣手やつれけれどいとひしもやどる

月かげぞさし。

　踏はなれはやてはまさるこゝろしは内はむやがれはき

の衣まて」これ川むかひに鼎律といふ里はつりぞそこにすみしかへ

あたる村長はりといへり。まうるとに七日の大雨に。刀祢川おびたゞ

しく出て。その里にかり乾たる稲あまたながれぬとなん。むかし

千相坊が奇特なりけんとりはいと多しおほくるまじ大水

なりといへり。

十六日晴。朝とくより綾瑙が家にて神代紀のこうぜちした。むかしはい

りて稲荷墓相などのよしをこゝとせり。行蔵院廣海法師。椿光卿。小笠

方舟。真城院恵林法師。などもはじめて人くはるまうでく。綾瑙が

こふまゝに麻屋の記をものしてやる。

十七日雨。千稔が常盤舎の記をかく。千稔綾瑙ともに名簿をさゝ

げてよめる。綾瑙

　末遠のみちのまでなるこの陸奥のゆきめぐりはしるみ

しあらなん。」千稔

　下露の玉とちるてふ松かげによりてとはでやことのはをみ

ち。」けふも神代紀。古今集のこうぜちせり。

十八日曇。古今集のこうぜち。未の時ばかり人をにはせられて。椿向

村の根本世蔦定右衛門がりゆかんとて渡留。手綜。舟まうけてわたれり。
神崎の社を右にみなして。左の岸にのぼり。世蔦がもとをとぶらふ。あ
るじは不保木竹窓がらがらにて。かの学に心をよせたり。その家の屋上よ
りみるところにて。なかなかなるさまなれど。かくてもひとよのなぐさめ
まゝなんとて真寶がちていへど。いとゞ乱らがはしく不やのにやぎらん
もくらきにもなぐれぬれば。きらひてさられとゞつぐ。はるゞとさるべし
てさきに舟よりわたりし人の河岸なる家にやどりしめ。あくれの
あるじまうのせり。夜ふけて世蔦はおのが家にかへりぬ。
十九日雨ふりしを渡りて。かしこの神社にまうづ。社の前にちんど
やまんじやとよぶ大樹あり。いと年へたる桂の木なりけり。
神代よりさかりてたてる湯津桂さかえゆくらんかぎり

ちかびなり。そもそも神崎てふ地名は。こゝより西北の方のあかひに。清久。
橋向押砂などいふ村あり。いまはへは刀根の河面にはなれぬなりしに。
元和慶長のころ。かなたこなたに水せく堤を築て。新田をひらかれたるな
りとぞ。その以前は常陸國河内郡の半田の里にさしむかひて。二里
ばかりの大沼なりし。この神崎の地はさし出たる山崎にて。神社あれば。
神崎とはいひけるとかや。そもそもむかしの中島に。片葉葦あるまは
しをて。二くさの葦生たり。上つかたなるはまろきにて陽なり。
下つかたなるは片葉にて陰なり。その島をふたつじまといひ。そこ
の浦を男女の浦といふ。平治元年の社記に。大浦とも。真世宇良とも
あるはこれなり。その時に大神あまくだりましゝと。今の地にはうつしま
ゐらせり。半田の里にては此神をとらはしていまだひまつりけん。今

俗にあしまさまといふ社あり。そハ安婆嶋のよこなまりにや。これをと
ほとりなる安波大杉明神もかよひて知らゆ。常陸風土記には。安
婆之嶋とみえたり。これより時々龍燈あがりて神崎の社に
かゝり。しバしありてもとのかたにかへりつることあり。となんいへる。また三代実録
に。元慶三年四月下総國正六位上子松神に従五位下を授られしとみ
ゆ。神崎の西隣の里に今も小松村ありて。正元々年十二月の文書。同二
年三月の文書などに。小松郷とみえたるをおもへば。これぞ子松神なる
を録られける。今宵ハ神崎なる大中臣光武朝臣神崎播磨守のもとに
やどりて。よもすがらかたらひあかしぬ。

廿日曇。巳時さがるころほひに。かの神崎の津より舟にてながれ
のまにまにくだり。佐原の里の本宿の岸なる永澤文香半十郎が家

につきぬ。あるじハ歌の道に心よせ深くて。むかし里が織錦の大人橘
千蔭のもとに具してやどりたまひし家なり。文香がこのかみ躬
囿。清原雄風とゝもに。まめしくあるじゝしよし。橘の老翁が香取
の日記にみゆ。かくよしある家なれバ。橘の老翁。織錦の大人などを
はじめとして。そのころのたゞえ人の筆のあとどもあまたひめもたり。
伊能景命。平右衛門 同某。政右衛門 などこれかれ集つどひたれバ。古語拾遺。積
德叢談。なにくれとかたらん。

廿一日曇。文香が蕙林舎の記をかきてとらせつ。巳の時ばかり伊能政
右衛門にぐして。小林三義がりゆく。家ゐこだちて。まめやかにあるじすることゞも。
日のくるゝに文香が家にかへる。景命。くすし平山忠則。門人などとともにはじめ
てくさぐさものがたらひたれバ。女子教訓。積徳などのこともせちにして。

けて寐ぬ。

廿二日晴。蕙林舎の扁額ハ村田の大人(春海翁)芳宜園の翁(橘千蔭)なとの歌かゝれたるになぐさめられし掛字の家かぎりなし。ひだりにかゝるによりてたちより。午の時バかり伊能某(政右衛門)にぐして。景命が許をとぶらふ。いとねもごろにあるじせり。伊能景傳(十郎衛)。宮崎ト庵。伊能源四郎。古賀屋某(九兵衛)。安見某(茂兵衛)などもどめとして。くさはまたとぶらひまうでく。源四郎ハ揖取魚彦が玄孫にて。今とし歯十あまり三つとなれり。そのおもざしかどかどしう生さきまみえん。曽祖父の名をふたゝびおこしはべりけうある子なめりとおぼゆ。其家に賀茂翁の真蹟の古言梯の跋あり。幹のかたちいとおほきく龍蛇のいきほひあるさまおもひやられたり。こや世にめづらかなる寶ともいひつべし。又そのころのうたよみ人たちの。東彦におくられし文に歌よみまじへつゝ侍へあつめたり。さまにくれの物みせなどして後。源氏物語のこうぜらる。夜に入りて永澤久香が家にかへる。景命。政右衛門おくりきたる。そは青木墓相の由来しるしたるふみどとせり。

廿二日曇。政右衛門まできて。村岡本谷徳卿が五十の賀の歌をこふ。きゝつゝいくよの春にかゝりしこゆるぎの磯のいそぎをしるなみの花とよみてとらせたり。加成紀(順)。宗景命。忠則などおもしろく申の時ばかりなゐふりぬ。今日よりおなかりなれバとて。江戸文をかきつゝく。夜に入りて日本紀のこうぜせり。

廿四日曇。香取龍勝から文ものせし。永澤久頼(啓吉)がもとより墓相の口傳をゆるし。ほとゝぎすの媼が六十の賀のうたかきあつめし歌

の序をもてはやすなりけれは久香久頴が母にて。そハなだたる人なり。
詠まこひければ。

千代へなん君がよはひをたづもなちぎりてちかき浜にちかくゐる

のよろしさ。夜にいりて忠則。景命。加成純。山野英二。古賀屋某。九兵衛
などもはじめとして。人々こゝにまた来集ひければ。日本紀のかうぜらる。
廿五日雨。景命にぐして徳鄰が許をとぶらふ。景儔。佐々木桂芽。な
どこゝに来はべりぬ。徳鄰が庭に菊のあまた殖おほしたるが。今を
ざかりにていとめづらかなり。あるじが貌かりし友とて。水戸の
圓通寺の住持にて。後に常陸國行方郡上戸村の長國寺に隠居
せられし道光和尚の。和歌のたまざくをとう出たりしに。早春浦。
衛の名のかれみをもてにあるなれてのぞらによくあるなされ

まは客。また山下遂年。
実ならんせし松にほしとおくまでにこの山ざとにぞ
へにける。かへされねど源四郎が許とぶらふ。母のなやます。祖母のなやみます。
などまあたらしくなるじせり。こハ栗衷が家ちかきけり。日くれて久香
が家にかへる。今日景命がかたりていはく。香取神社のちかきあたりに側
高明神といふあり。としどしに髭頭撫の祭といふことあり。そハ酒宴の席
を設て。賢酒をくみかはし。口のあたりの髭頭なでし者はあれず。
ちひて三杯のまはるをならはしなりといへり。又いはく。香取郡山邊
村に篩摺の舞とてあり。笛太鼓などにあはせてうちしとり唱
歌をうたひてまひかなづるなり。廿年とせ卅年とせがあひだに必
ぢかく舞かなでける。香取神社にまうづることありといへり。又いはく。

下小堀村の浄福寺の佛事に。鬼の舞といふあり。これは廿年に一度に
なるまつりなり。佛の假面。鬼の假面。牛頭馬頭などの假面。いづれも
いとふるきものなりといへり。

廿六日雨。未のさがりより晴ぬ。常陸國行方郡延方の里人澤田弘。閑
澤嘉徳。四五右衛門とぶらひく。弘は水戸の殿の州学士なり。おのおの題をさ
ぐりて歌よむ。今日香取左膳がもとよりせうそこおこせり。日のくれより
德郁が家にて積德のまどゐ。おとこ女席にみてるとあるぢ
よろこびてかぞふべし。

廿七日晴。冬香景命にぐして此まうりのゐる所はとみんとていづる
のちど東傳が家をとぶらひてあそびぬ。諏方神社の鳥居をくゞる
て。いとこゝるなる石坂をのぼれば。山のなかばに別當の坊あり。坊の前は

天明三年といふとしの夏ふたもとの竹生出けるとなり。此里を
らし殿津田日向守平信之朝臣のよみたまへる歌なり。

松枝のときはのいろにちぎりてや生出けらし竹のふた
もと。此おくに四首あり。坊の上なるに金毘羅大権現の祠あり。ち
かき世これ祠を建んとせしとなり。まがれる樅の木ありてさまたげなれ
りとて伐んとせしに。その樅の木一夜のうちにとざまへ向たれバ
伐ずてやみにきとなん。そもそも金毘羅大権現とまうすハ。釋迦化
現の大聖。千臂千頭。金毘羅童子に。崇徳院の御霊を配せまつりし
にて。霊験いちじるき神にぞおはしける。又石坂をのぼれバ山の頂
に諏方神社あり。さてよりハ刀根川を打こし。板来。鹿嶋などを眼の
まへにかゝりてみゆ。社の右の方の丘の上にゆれ合の松とていと

ふるき松の木なりけり。此松風にふかずともなし。いみじう
ふりうごかして。いと遠あるにもいろめしくきこゆれバ。かくて八歳にぞされ
たれ枯ぬべし。ひとのわざを伐(キリ)て。一本(ヒトモト)をもとくりんによらじとて。別
當の法師もうりて。匠人(タクミ)にことなくせぬ。匠人も保とをうけて。四日許
らんとせし前のおど。此松のまひ二尺(フタサカ)ばかり離(サカ)りて。そのおもてなる
かりしといへり。二(フタ)もと此かたよりの揉(モミ)。そのあひの松。いばらすまと
とかくぬ世のことなれバ。まのあたり見しれる人もおほく。ゆえし
くしきことぐもなり。別當(ベタウ)の坊(バウ)にて酒のみなどしけれ。おの〳〵
誘よむ。余

諏方の海のかりきめぐみをとかげり滑とおくうはしてい
はく外垣。荘厳(シヤウゴン)寺といふ古寺(フルデラ)にまうづ。文明十三年三月九日と

あるなる石碑(イシブミ)あり。景命が家にて昼養(ヒルヤシナヒ)しけるめぬ。木谷徳郷が家をと
とぶらひて志もしやしけむ。さてやすらひあそびにぐして牧野(マキノ)村の観
福寺にまうづ。いとふるき寺なり。開山上人の碑(イシブミ)に。下総國大戸庄(オホトノシヤウ)
牧野村。観福寺開山等□。寛平九年巳巳。五月十八日。とありされどいと
後にたてたる石碑(イシブミ)にて。それのみの物なりしを。また天永五年乙酉六月
廿五日。明應六年丁巳。六月□□□となどたてしなる古卒都婆(フルソトバ)あり。いづれ
も世にいふ板碑(イタビ)なり。此うちに楫取(カドリノ)奥彦が墓(オクツキ)なり。石塔(イシタフ)に光雲院楫補
奥彦居士。伊能景良。とありて。年月をとバかりやそり。日のくれに平まるが
家にかへるを。宵の景命が妻のなま。女(ムスメ)のなま。三蔵が母の法ね。妻あ
れその。などもはじめとして男女来あそひなれバ。積徳のともがた
とし。

廿八日晴。久顕とともに浄国寺の墓相をみる。それより景命。政右衛門
にともなひて。三荒がりゆく。かの人ねもごろにまうけしてかゐる
やう。あれハたそかれはかり久香が家にいたる。北條時鄰とぶらひきてく。
根本邦興。茂兵衛。金田某。平三郎。名簿をさゝげてまゐらせて弟子となりぬ。大戸神社
の祝片野某。右京。それも名乗をかはせてすゝむるまゝに春樹と名づけ。歌をそへて
とらせけり。

廿九日曇。久顕。邦興。金田某。平三郎。などぐして。あかしこの墓相をみる。未の
時ばかり香取へゆかんとてまかるをはなむけ。久香。恭寛。景命。久顕。などおくりきて
は。十三塚とていとひろき畠中にある墳にいたり。むかしこれをほりけり
なるもののありし。墳の上の芝を切取て。おのが寺の庭にうゑけるに。その
夜甲冑きたる兵士枕上にたちていかでかわがすみかの芝を奪ひけるぞ。

さくくみせは不にかへしおかなんと。おりごゑにいひいかりたてるさま
をゆめにみえければ。おそろしがりてまたもとの墳の上にかへしうゑ
にたとなん。またその墳のめぐりの畠をほりかへせば必ずはやり病をう
けてくるしぶなり。今ハその畠をはぐくむものたえてあれよし。久顕い
へり。それより雨だちしめき出しがやがてやみぬ。香取神社の大祢宜大中
臣實命朝臣。香取上総介のがかたをとぶらふ。その子實衡。正判官見神官香取宣綱。左膳
まめやかにゐるじまうけせり。夜にいりて小林重規。舍人。尾形是興。弾正など
とぶらひまうでく。重規ハふるき書よくよみて伝へられたるもい
ひとされるなり。そがよみて出せる歌。
もくらばにみしハさちぞ今日よりハ千年もかのむまれ
やれきみ。是興ハかし学をこのめり。その父中津の宮の久保木竹窓

さきに香舟法師にまなびてざえにすぐれし人なりときこえつる。
晦日晴。宣編にともなはせて香取神社にまうづ。御まへの庭に大
なる松に杉ふ二本なてり。それさへいく千代ふりけんものとおもほ
ゆ。このあたりなる老木若木の杉いとおほかり。

まつろはぬ国ともやはらげし大神のみいつかしこきにはれ
なる松。」社のうしろの方に櫻の馬場とて、とほくみやらるゝかさね
なり。櫻来の里はいづこなるらんなれど、いひしらぬとほざ、をちかたに
けぶりのたつばかりひともむらびさのあたりまで、たゞかにそこともわかぬひさら
れぬ。神宮寺の観音にまうづ。洪鐘の銘に、奉懸下総州香取太
神宮寺大鐘一口。大旦那周防守宗廣。大工秦量重。于時至徳三年丙
寅十月□日敬白。とありけり。實命朝臣の家にかへりて、ふるくはさへ

かなる文書どもをとみるに。保元治承などのころのちくの文どもいと
おほかり。今日おのれが社頭にてよめる歌どもめでくはずれよまれ
しうたい。

ゆきかぬるなみがた向のとれちく紗をはゞかりずやみちれゆき
はらん。」直編。是與。重規。敬房。香取伴庫などくぶしひく。永澤久書がりは
かひとやる。
十月朔日晴。重規。宣編。利次。頡賀大夫藤などくぶしひく。巳の時ばかり久香景
命。源四郎などむくへのために、おくれり。家あるじなすくれのまうけして
ゆるじせられぬ。午打下るころ津宮村の久保木竹窓のもと太郎右衛門がもと
ゆきとぶらひて。
くれなくれよのふることゝもかたらひむかしみがこゝろにこゝろあるまゝに

文机。亡き翁名ハ清闌。字ハ仲默。ひとつの号を蟠龍といへり。水谷春舟が
をしへ子にて。かしこまれびにひいで。あつくまなび人の聞えあり。春
舟名ハ友也。下総國銚子の里にて生れし人にて。それちゝまハ紀國人なり
とぞ。何くれの物語にほうけして。中のとじめばかりにまかりかへる。時
郷ハこゝより鹿嶋ざまへかへりいぬ。久香。景命。源四郎。にくしてふかびね
香が家にうつる。香取郡大寺の里人八木忠嘉。権兵衛名傳とさしげまでを
しへ子となりぬ。夜にいりて古今集のこうぜちん。永澤恭寛。伊能景傳。
加成純。平山忠則。黒田見龍。藤藏景命。久香。などもむしろにはべり。

二日曇。朝むに雀のまたむれゐてなきけれバ。

なにごとをほぐとか村すゞめおもしろげにハなきさわ
ぐらん。竹窓のを翁。香取實弼。小林重規。香取宣備。などとぶらひきぬ

でく。源四郎も酒肴ひさげてきたれり。夜にいりてれいの古今集をとく。
恭寛。宗順。忠則。見龍。木内維祺佐兵衛。田城寺之彦次郎左衛門など来けぬ
り。竹窓のを翁ハを宵ハとゞまりて。まんがうかたらひあかしけり。

三日晴。辰の時ばかり竹窓の老翁かへりいぬ。香取實命朝臣のもとよりせ
うそこありひめおん人ゝのこふままに。何くれのものゝふみを點にかへてさう
せん。夜にいりてまいれ古今集。まだハ源氏物語などこうぜちん。

四日晴。竹窓のとぢがいとよりせうそこして。かうかうのよろりかね尚
書大将をかくれるをよろこべるよしなり。実命ぬしも饅頭をめぐま
れぬ。またまやくよまれたる歌をみせられし中に。めでたくきこえ
しは。冬の月。

山の端のゆまよりいでゝ雲よりもひかりをみがくふゆの夜

此月。尋郭公。

なきつばさまれしきりもなるべきをいかにかはれん山

ほとゝぎすん。山家雨。

おちられし峰のこずゑしれねとつゝて雨にならまの山の

下いほり。まれ登寿子みち行旅友。

くもゐさとかはるまはらじやけふひにせまりでおなじ旅の

あはれ。ことしはれいのくはじひかれば。古今集。中臣祓。などよみつ。

本谷徳鄰兎をひさげてとぶらひまできぬ。

五日晴。今日出立んとせしに。景命。忠則。茶寛。伊能穎子。などまでおくて

わかれをしめり。余がよめる。

わかるゝもまたみやびなる友垣をわかのむしろにへだてざり

けり已れとわかれ我宿河岸より舟にのりて鹿嶋ざまへおもむく。不香。

秋まちてぬとてゆくなみと鳴る渾ひきとなむべきものかはくだ

にならし。景命

ほどなくまちてし風ひさらん舟出してゆく君よりむ

べく。不香。景命。忠則。おくりきたる。津宮までまかりて舟をおりて休所がり

とぶらふ。あるじ舟中のさかなのまうけにとて鯉をおくられぬ。忠則ハ

つらにそてまどをとらはく。二人ハともにまられとしみてとまらんく長田輔

ととまるて。加藤津の茶屋にやどむ。不香ことおこなひて。れいの鯉をと

らじ出かり。子を直なにしまず殆ほとむかれてんなどたゞず

れはく。板来がまでなるほどハよま板来出島といひて。高名の

十二の橋ある所なりけり。板来ハ常陸風土記に。行方郡板来村近臨海濱ニ。

安置驛家。此謂板来之驛云〻。古老曰。斯貴満垣宮大八洲所馭天皇之世。為平
東夷之荒賊。遣建借間命。引率軍士。行略凶猾。頓宿安婆之島。遥望海東之
浦。時烟所見。交疑有人。建借間命仰天誓曰。若有天人之烟者。来覆我上。若有
荒賊之烟者。去靡海中。時烟射海而流之。爰自知有凶賊。即命従衆。蓐食而渡。
於是有国栖。名曰夜尺斯。夜筑斯。二人自為首帥。堀穴造堡。常所居住。覘伺官
軍。伏衛拒抗。建借間命縦兵駈追。賊盡逋還。閉堡固禁。俄而建借間命大起権
議。校閲敢死之士。伏隠山阿。造備滅賊之器。厳餝海渚。連舟編桴。飛雲蓋。張虹
旌。天之鳥琴。天之鳥笛。随波逐潮。杵島唱曲。七日七夜。遊楽歌舞。于時賊党。盛
音楽挙房男女悉盡出来。傾濵歓咲。建借間命。令騎士閉堡。自後襲撃。盡囚種
属。一時焚滅。此時痛殺所言。今謂伊多久之郷。臨斬所言。今謂布都奈之村。安殺
所言。今謂安伐之里。告殺所言。今謂告前之邑云〻。日本後紀に。弘仁六年。十二月

戊午。廢常陸國板来驛云〻。和名抄六の巻常陸國行方郡の郷名に。板来云〻。
などもみえたるあなり。和名抄のかりまきに。板を坂にかくりしハ誤れ
り。元禄十一年といふとし。西山の黄門の殿のおほせありて。すじを潮来
とはりためはじめん。潮ハ潮とこゑかよへバ。潮のいたり来るよしにてさる
すじをバはてゝまもしにや。またハくるゝの舟のまつど湊なれバ。
朝宗のすじ心をとりたまひけんかあるべし。潮来とはなげけるすじハ。王
維。韋應物。白居易。劉滄。などがつくれるかくらかよみゆ。朝来てふすじも。
晋書の王徽之が傳にみえたれど。心ながへり。此にたき達のくれのことばに潮
をいたとよみしあるせしバまぎたるしるよりどころをしらず。名とと
ろの霞の浦にちかきあたりなり。そハ風土記に。郡南二十里香澄里。古傳曰。
大足日子天皇登坐下総國印波鳥見丘。留連遥望。顧東而勅侍臣曰。海即青波

浩行陸。是丹霞空朦。国有其中。朕目所見者。時人由是謂之霞郷云々。和名抄六の巻行方郡の郷名に。香澄云々。などみえたるに。吾友小宮山昌秀ぬしの翁が考に。行方郡冨田村のあたりをかすみといふ地名のこれり。風土記によりて地理を押考るも。必此冨田村がいにしへの香澄の郷にて。霞の浦は此里の湖辺といふなるべしといへるは。さることとおぼゆ。延方の浦とこぎめぐりゆく。閑澤嘉徳がもとにやどりせむとせしかど。家にをらじ。日のくれに鹿嶋の大舟津にいたりぬ。舟津といふは。大安寺の私財帳に。津国西成郡船津とみえ。平家物語三の巻有王嶋くだりの段に。彼嶋へわたる船津とありて。船つくにいふ名なりけり。此里の猿田知意郎儀一がもとにやどるべくして。鹿嶋の神社の御前なる北條時澄が家につきぬ。時澄時都父子ねんごろにあるじまうけせり。今宵は久香。畢命。知意。などなにくれとかたらひつ。夜ふけてねぬ。

六日。雨ふれども巳ばかりのころ晴ぬ。時澄。久香。畢命などぐして鹿嶋大神の社にまうづ。みやゐ年古りていとかうがうしく。たふとさこころにしみておぼゆ。

大神の御いつになごみ心根よしこの河原の国に住めるひとぐさ。この神社のゆゑよしの時都が鹿島志にくはしくつくられたらましあれバ。それによりてくはしくいはじ。時澄が家にかへりて後。ふたたびおほかしこみめぐしむやとて。時都。治成。智意。久香の ざくもにいざ。御手洗川にて。

萬代もみたらし川のそこふかきめぐみにしめる神の
ここ人よにかなめ石といふは。光俊朝臣の夫木抄雑四 石の御座とよまれたりけり。

やはぐるとも浜めし神のみまし石うごかぬためしが伊代
のかためなり。高天が原とよみし八束の浦にのぞみて。えやいとぬけし地
なり。鬼神塚。末無川などいふあり。日のくれに時澄が家にかへる湯ひき。
いひさけちどのみくらひて後。糸香景命ハとられて大舟津へくら
んとい。ゆるのはさげとく舟出せんの心がまへなりとぞ。されど夕
ぐれのほどなどくしからんと。ためのまはするじの時澄時敷のし
ひてとゞむれど。糸香かまどは豆くべてやけん。かうべ（首）をふ（振）りて
うけひかず（不諾）。糸香命も心ならずともなくるなるべし。今宵真壁孝
虎。原田大学。田野屋某（仙之助）。近江屋某（次兵衛）なども つどひまうでく。
七日晴。糸香。景命。大舟津にやどりたればせうそこふ。千代滝だろう
大宮司中臣連則瓊朝臣（塙右衛門）のもとをとぶらふ。なにくれとまうけ

してゆるぎせられぬ。大祝卜部瓊綸（松岡號）藤原林久（吉川縫殿）近松某。（市大夫）
嶋田房俊。（権大夫）萩原常敬。（藏人）塙仲慶。（汀）青野満幸。原田孝虎。猿
田知意。松信治成。北條時郷。近江屋某。中屋某。（十左衛門）などの人々ほど
ひてこふ（請）まゝに。神代紀のかうぜちせり。申の時ばかり時澄が家に
かへる。治成が松屋で扁額のもじ書てあたふ。夜よいりて積徳のと
ぶらひ。
八日晴。大宮司の家にてれいの神代紀のかうぜちせり。延方の
里人小峰昌芳（孫右衛門）。関澤嘉徳。とぶらひまうでく。夜にいりて時澄
が家にてまた神代紀をよむ。
九日。ゆふべより雨ふりぬ。則瓊朝臣のもとよりせうそこあり。
ひとはらひて歌よむ。余ハ江月。

さもりとをバ小舟のさをとにもたせて志ばしはみやりみさびしの
月。此おもひをおもひけれども。びんくに出けるハ心ちぞ紀よざとう。貫之がい
さめなふそかきにて。むつりさにとどめつ。申の時ばかり昌芳嘉徳ハ
かへりいぬ。夜宵ハ神代紀のこうざちやり。荻原常敬が錦園の扁額
書てはらふ。
十日雨。則瓊鈞持。松岡瓊綸。はひぐして訪ひきませり。人々の許まで
にすの書てあたふ。松信治成おのれをとむらへて近(近)くはやくまうけせり。乃ほし
杉屋(スギノヤ)の記を書てとらせけり。備幸が俳諧(ハイカイ)の片歌(カタウタ)よみてもて来(持来)たれば。
返よみてかへしせり。日野屋某がこへる牛の画の賛をとかく。よるになり
て古事記。古今集。などのよみどもせり。
十一日あさけ(朝明)くもりたれど。やうやくにはれぬ。巳の時ばかり時澄にまうれとと

はなげていづ。時鄰ゐくしるべせり。護國院。神宮寺。物忌(モノイミ)の館。根本寺など
まうでめぐりて。大舟津なる猿田知意がもとをとぶらふ。父の知興
とやにいとよろこびてもてなせり。知意がこのまに松風舎の記を書
てあたふ。ここより舟にて延方の里にまかる。時鄰知意をぐせり。関保
嘉徳がもとにいたれるハ未のさがりなるべし。夜宵ハ峰昌芳。香川恭
元。壽伯(伯)をなどひてあそむ。昌芳。泰元をはじめ。ゐずしの嘉徳義
保父子。なども。いづれも君子の風ありて心ばかしはわりなきさまなり。
ここは水戸の殿のしらしける地(トコロ)にて。西山の黄門の君より。代々かしこき(賢)
君のみいつくしみ(御恩)あまねく(布)しかれ(行)。魯衛のかぜ(風)にもいひつべく
におもちたり。そがうへ(其上)ちかきころ(評)のはかさ(督)小宮山昌秀のを
為。これさとみ夫子の廟堂をたて学士をとりおきて。国人をさとし(教)

へだてさしあぐる。久保木竹窓もち翁がすゝめによりて。此御学
にめしあげられ。月ごとの八日廿三日にハ。かならず出のこう説せらるとなん。
十二日。くもりて北風はげしう吹たりしが。遂に雨ふり出ぬ。大
洲の里人村田定直郎平三とぶらひきつゝ。定直かたりけらく。村田
織部の大人のもとに侍りしやハ。ちかきのくさの香取郡村田とい
ふ里より出たまひて。ことが家ハそれやからなりき。そハ佐原よ
り二里ばかり西の方なりといへり。家あるじ家従が汀翁の扁額
をもてありしを。またそれの義保郎儀八に具香てふ名おはせ。その説
をかきてとらせつ。そハ萬葉集のことばどもなり。
十三日晴。関澤某輔負とぶらひく。それにつゞけるまゝに勝冬と名おほ
せ。緑屋てふ家の名の扁額かきておくる。猿田知意をとぶらひぬ。

巳の時ばかり昌芳嘉徳時鄰とふもの。文宣王の廟にまうづ。あるじ
とおもはれる學士澤田弘みちびきあるべしてなにくれのゆゑよし
ものがたりぬ。そもそも此聖廟ハ小宮山昌秀のぬし心おこして。水戸の
今の殿の清筆をそめたまひし至聖先師孔子之神位てふ牌を安置
て。ユ木のたくみわざをもはじめ學校に文庫に建られぬ。また朱舜水先
生のつくりし式によりて大成殿をも建はじめ。ちかきとしごろ
なりぬべきさまにて。工人ハ今日もいそしみゐたり。そこよりう
しろの山をみれバ。松のならびたてるさまおもしろきにいとよし。
この山を内田山といふ。ふもとに片岡の池あり。その池をうち越し
て。遠ちの方に鹿嶋嶺みやられたるハ。繪にかくとも筆およびかたきさまなり。

内田山にて打みるかたちを見れ池よりをちこちに続く
かしまね。昌若ハちかよう家にかへりぬ。辻村とふ所に硯宮あり。鳥居の扁額ちかごとくしるさまなれど。させることもなき叢祠なり。潮来の里に海雲山長勝寺てふ古き寺あり里の長と関戸範司にしるべせさせて鐘楼の洪鐘をみる。銘に。常陸國海雲山長勝禅寺鐘銘。有序。寺始於文治元年右大将殿時所立也。迨今元徳庚午百二十餘載。乃為鎌倉殿御願所。大檀度道暁禅門。以古鐘未宏与貴眷等共施財新而大之。住持妙節長老請於圓覚清拙叟為之銘曰。維古蘭若。長勝厥名。寸莛撞徹。令器未宏。爰命鳧氏。鎔範速成。鏗旬殷雷。吼鯨。音聞佛事。開聾啓盲。大哉圓通。十虚廓清。霜天月曉。落景初更。真機普發。衆夢齊驚。深禅偃仰。若趣休停。

客船夜泊。常陸蘇城。上延暦算。下息戈兵。檀門茂盛。梵刹堅貞。海雲日横。青山峥嵘。人天瑞令。相道通亨。元徳庚午十月一日書。道囚。圓月。道超。秀光。貞種。種立。清原高秀。妙椿。妙亀。道妙。浄囚。定祐。浄妙。行佛。妙印。如見。妙一。妙西。道寶。頼生。頼念。生阿。弥五。光囚。善妙。徳阿。々親。寂仁。止心。浄心。随仰。了心。妙囚。祢運。維那見道。大工甲斐権守助光。住持傳法沙門妙節。大施主下総五郎禅門道暁。大檀那相模禅定門崇鑑。とありけり。崇鑑ハ相模守平高時朝臣の入道名なり。さて文治梅とて。文治のころ鎌倉の右大将の殿のうゑられたりしなりといひ傳へし梅の木あり。ひとゝせ此梅の根おひかゞりて。髑髏をとうぐろかち出けることはりといへり。さてハおくつきどころしけや。寺より二町許西北の方の江のほとりに。遊女の家あまた続くる一さとあり。江口神崎のい

にしへのさゝ波はおもしろくはべし。そこの亀坂某助喬が家にやすらひみて
えんがはに。海ひろく山とほやくしてそこかなる方にうかひのみつよ
ろうどびまかりたる。えもいはずがきし。こより廿町許西なる。上戸(ウハド)村
の観音寺といふに。古き鰐口ありて。観應三年。五月十八日。長福寺。願
主内藏国安。とゑれりとなん。またそこの里にて地(ツチ)よりほり出し碑に。
十方三世佛。一切諸菩薩八万諸聖教。皆是阿弥陀。右志者。為二過去悲遝出
離生死法界衆生一也云〻。徳治二年。八月廿三日。とゑりたりとぞ。かくゆふぐれ(夕暮)の
ほどに昌芳が家にかへる。昌芳まあやうにはすぐせり。それより推慶(孫兵衛)
心ちそこなひてふし(臥)たるを。おひて出あひぬ。孫の童(ウナヰワラハ)(孫三郎)まづ
翁(ヨハヒ)十とせあまりひとつなりといへど。いとかど〻しきさまにて。おひさき(生長)
ゆかしくみゆ。又肖八弘(ヒロミ)。泰元。嘉徳。などはべひてなにくれとる

ちひぬ。嘉徳いへらく。此里の山田坪(ヤマダツボ)とよぶ所に。茂岳濤といふものあり。そが家
に正治二年の位牌(ヰハイ)を伝へもたりといへり。
十四日晴。朝とく旅よそひして銚子ざま(方)へおもむく。昌芳舟まうけ
ておくれり。時敷をもとめおひぬ。人てもれをうしみて舟まで
おくりきはべ。泰元舟の中のみちなにとて。いとおもしろきなる鮒(フナ)さ
はまてあたれり。奈左可(ナサカ)の海をこなたゆくほど。こはうしかども順風
なれバ志ばしの間に二里ばかりまかりて。息栖(イキス)の神社のとのゐのもとに泊
りぬ。鳥居ハ水の中にたてり。それが側(カタヘ)に女瓶(メガメ)男瓶(ヲガメ)とてふたつのかめ
あり。水底(ミナソコ)なれバさだかにハみえず。これを忍潮井(オシホヰ)とよぶ。諸国
里人談二の巻にいへり。舟よりおりてやしろ(社)にまうづ。所(トコロ)のさま駿河
のくにの三種の社に似たり。さてながれのまたにくだれバ光後の

朝臣の。袖にかれたるなどよめりし萩原のさと。ゆみとるかたはみゆ。
そのひむがしどなりなる日川と云里に。沙山とて木草なきやまあり。
沙のみたちのぼれる高山あり。右のかたハかみつふさのくにの香取
海上のさつの郡つゞきたり。菟上といふハ山上憶良臣の鎮懐石ノ歌
万葉五の巻に。うなそこおきつふかえのうなかみの子負の原とよみし
るをおもへバ。海のそこなるよしの名なりけり。此あたりハ河の
ひろさ坂東道七里にもあまりぬべし。とほくかれなどに吹くもり
て。かすむかひたれバ。ふり舟も心にまかせず。時うつりてとおきよ。
いかにともあらぬ。いとさむさに。苫ふける下にふしたるに。月のひ
かり苫のひまもとめてさしいれり。

かどり潟なかみさゆる月かげもさすやとゞぶねの苫の

ひまより。」彼のさゞりバかりに。波崎の里の上山慈延。細代長が家に舟
をとゞめてやどる。あるじの慈延らまでの義旭まめやかにかゝらひ
せり。近刈にとゞめるくひし松崎茂條正かずいまうでく。おもむく
るまゝに庭の梢にゆかしく折あまりて。浪のおとにかたちく
まごろもちひ。夫木抄雑八に。光俊朝臣の。浪こゆるおかしまがさきを
よみし歌の詞書に。くまのひむがしのきそにて。かしまの社よ
り七里とさゝれたるハ。この所をいへるなりけり。
十五日晴。昌芳時邦をぐして。これまたかのさきみんとていはぎ
旭蔵條石もまゐるべせり。舟にて銚子のさとに至る。そもそもてうし
といへる名ハ志摩のくにの答志と音かよひたれど。かんなにハ天
不志とかくべく。詞の心ハ出伏。または遠伏などのよしなるべく

なるらむ。又しに銚子とも。鳥觜ともかけるハ。後のひがことなるべし。
この里ハ人家みちみちて。あまりありて。いとにぎはしき湊なり。飯沼山円福寺ハ十一面観世音光をやはらげたまひて坂東巡礼の札所で廿七番にあたれるなりの庵なりけむ。飯沼でふ大沼ありしあとなればざハよべりとなん。なるに飯沼といふハ沼にかよはし械におこれる名にや。美濃國の揖斐の郡。下総国豊田郡の飯沼。などおなじ心なるべし。また飯倉。飯山。飯田。飯嶋。などハ地の名くにぐにに見ゆなるや。飯倉ハ械谷にて。械かけまうしたる谷にや。倉ハ谷のことにて。くらおかみの神とまうしゝや。谷の龗の神のよしなり。飯田は械かけし田。飯島も械ある嶋なるべし。大和のくにの吉野郡に飯貝の里あり。そこも械之井なりけんを。後に飯貝とかたはやまりけ

となるらむ。坂東観音霊場記九の巻に。飯もる器うかび出しよりて、を飯沼といふよし記るしたるハ。うちたるはさへごとなり。だうのかたはらへに天正天文のころの石卒都婆五基たてり。また歸真早器居士。于時文禄五年丙申。六月十八日。山城国住□□敬奉為逆修□□と表せるのしるしの牌なり。これに附てもやう早器の草紙といふもの語はつくり出しとぞ。さと人らは申しつたへたり。また六角の石のふる塔あり。武蔵國多摩郡芝崎村の普済寺なる。延文六年七月六日とゑりし六角の石塔におなじくえてみゆ。和田の不動堂ハいとこゝるあやしにて。みやりのけしきにゐるかたなし。そこより東の方十町ばかりゆけバ。みをいさゝか礒べのさま。岩のかたぞ見えまひ。よせくる浪。ともなつめたるあはれさ。ことばにもふんでもつくしがたし。めどかるる。

帆かけ島。三一嶋(サンイチジマ)などいづれもめづらしき目ひかられぬ。なかされなるさ
ハひんがしの海づらにつゞきて。そのきはみをしらず。
なかなかに海のおきに杉さへもみえなくにいづでら浪の花八
さくらん。日くれはてゝ華延が家にいたる。今宵伊勢屋某。(四郎彦)北
川某。(権七)条川某。(太兵衛)などさるなひさげてとぶらひきぬ。
十六日北風いとはげし。時鄰。昌芳をゐて。銚子の里にいたる。二人
ハこゝより舟にてかへりいぬ。こゝかしこみめぐりて。慈延が家にいたり
しば。日のくれぬるなり。今宵祖龍和尚きましたれバ。なまくれ
とかたらひあへり。和尚ハ下総国海上郡岡臺村なる法雨山等覚
寺てふ曹洞宗の寺のあるじなり。そこハ銚子より八廿町ばかり西のかた
なりとぞ。夜中いたうふけにけりとて和尚のかへりいましてのち

ねめぐり出ぬ。
十七日雨。伊勢屋某。(徳兵衛)常陸屋某。(勇七)ひさげてとぶらひく。こ
宵ハ積徳のもとにやどりぬ。
十八日晴。松濤茂條まうでく。こゝしたのあたりにて。人々のものかきてよ
とらひぬる料紙(レウシ)の。いそがはしされ書ちらしてすゞりのそこに猶
おりたれバ。今日ハとてかたはしより書きてゆくに。おのがてなぐさ
心にもそゞろがはしけれバいとあやしくれをかぞふれバ。
紙筆に罪をおはせておのがはかりのがれぬ事をとむ
にくまび。とひとりごち。ひとりゑみぬ。
十九日こそくもれり。義旭とともに川をとまりて。銚子の荒野とい
ふなる堀順祐(ヨシスケ)(平左衛門)が家をとぶらふ。日くれて岩本田長(タカナガ)(芳五)が蘿堂(ツタノヤ)

にう法る。田長ハ京都人なり。荒木田久老に学びて。病床漫筆にも
その名みゆ。俳諧の片歌に名をえたり。
廿日雨。植田梅史。徳兵衛 櫻井某。佐三郎 山口南示。堀順祐。同宗知。平七 など此
法どひしかバ。古そ集またハ墓相のことごとくて。
廿一日晴。田長とともに清水庵の鶴堂和尚のもとをとぶらふ。和尚ハ常
陸国鹿嶋郡安坊の里なる安祥寺の住持たりしが。ここに隠栖て。た
心よざりなくおくなすひにまされたり。
さしねをしぎ板がきのひくき屋にすむちたるおのみが心
だくさや。とぞいひける。表にいりて木里富文。庄次郎 宮本貞康。太右衛門
保立安平。英助 おぞそじめのいれんくつどひしかバ。古今集のこうぜち
せり。賓満されて来法師 御民部 とぶらひきませり。

今より八本だち此松の下家にうれちよりてぬれんとぞ
めぐとよまれしとへし。
たれむかひなかしよあかねかさざまくかさちかけん松
の下家。富文かくりけらく。この里より南の方上三里ばかりに
玉崎明神あり。そこハ海にさし出し洲崎にて。えもいはぬけしき
したる所なり。今より五十年ばかりむかし社頭の松の木を伐
るに。切りはなつままに。やがてかたへなる楠に飛付たりしが。なほ
楠とともに枝さしけて立さかえたりといへり。宮本貞康かたりけらく。
玉崎明神の近きあたりに妙見の社あり。そなへの礫べに。海より出る
小なる石どもの打よするとおほかり。此国ハ石なき国にて。家の敷
石。竈のつき石にし。中島の立いし。何くれに用るハ。おほくこれに打よせたる石

なり。このいし常にはとることなく。毎年のむつきのはつかの日より
末十日ばかりがほどは。神ゆるしたまへりとて。ところの人とりてうるなり。
来つどひて。かふ人あまたなり。その打よせたる石の中に。ある石と
て笛のさまにほりたる石あり。これ平田篤胤が天の石笛と名づけて
めでまどはるは。これなる石なり。あるひとのいはく。そをふけば
法螺の音にかよふゆゑなり。まさは海鉄砲とよべりとぞなん。
廿二日晴。南風はげしう吹ぬ。富安田長とともに。畠田村の一立山
浄国寺にまうづ。堂の前の楓のいとよくもみぢしたる。常葉木
の中にまじはりてなり。
これやこのみのりにこゝろそめぬいろの山のもみぢは
ねとよめり。寺のうしろのはやしのすゑに。望西台あり。利根
川筑波嶺かけて。西の雲ゐはるかにみわたされぬ。
そむかしにもとむる清法はかぐ身に。あの雲ゐをとみやられ
しき。なほまた順孚和尚。院代忍嶺なりし。なにくれのまうけ
してあるじせられたり。和尚は江戸深川なる道本山灵巌寺の学頭
なりしが。この寺には住持せられしなり。このごろ誠阿上人（弁嶺和尚）教を
奉りて。道本山の貫首となられしより。和尚かはられぬ。そは増上寺の
学頭なり。佛学はさらにもいはず。歌の道さへひいでたまへる智識にてお
はしければ。わかれををしくおぼしまゐらせける上人なり。夜にいりて雨ふ
り出しが。籠のやれよりこぼるゝころほひに晴ぬ。今宵もれいの人〳〵来つどひ
たれば。古を集めてうたよみし。
廿三日晴。宮本主水がもとよりせうそこして酒をおくれり。上山義旭

め酒ひさげて（提）とぶらひく。植田某（徳兵衛）。大里富文。岩本田長。などゝとひて。
酒くみかはしぬ。未の時ばかり。ゆひぐして義旭が船にのる。富文。順
祐。貞康。舟までおくりきぬ。舟ともやひするころ雨ふりいづ。青
江戸文をかく。

廿四日。雨ふり南風はげしう吹ぬ。かくては川をこゆるべくもあらじとて。
慈延が家にいりてあやふかれど。たのむ富文にいひ（云）たしけることは（期）
そむ（背）きたがくさま。舟人あまさかたらひ。まかぢ（両艪）しじぬき（繫貫）て川をさかのぼ
る。いと（甚）ふる（振）浪いとおそろしく。舟は中生（イキ）なるこゝちもせず。岸にえま
まだ義旭がとがむ。いかに心いたましめけんと。おもひやらるゝし。とか
くして舟ね目出度町（ドウデタチヤウ）といふ所の河岸にはてぬ。富文。順祐。などを
そひめて。いかにしてこゝろ起ましけんと。なる（或）は。おどろきぬ。ある（或）ハ

ふるびて。あがしこゝろもやまず（不止）。田長ゆゑをとうちて。尾生（ビセイ）がこゝろ
ざしにやたまさりて。ちぎりたがへぬまことのみかは。涙をおさへつ。日の
くれより荒野の円明院にて積徳墓相のこうぜちあり。男女五百人
あまりむしろにみてり。堀某（理兵衛）がこゝろまに。順孝（ヨシタカ）てふ名おくりし
は。順孝ハ順祐が弟なり。土浦の城（キ）のべなる中城（ナカジヤウ）といふ所にすみてなに
くれのみやびこのめる人なり。

廿五日晴。義旭むかへ（迎）の舟まうけてまで来ぬ。富文。順祐。順孝。宗知。
田長。貞康などゝ。おくりて。未の時ばかり。義旭をぐして富文が
りとぶらふ。あるじあつく（厚）まうけ（設）して酒くみかはせり。やゝ時う
つる。などや日もくれなん。いそがせたまへなど。舟人はいへど。
友がきはさられをゝしみ。ふなびと（舟子）はよばへ（招々）どこれ（叩）ぞれ

りはくれぬる」ゆふぐれにむかへられていづ。それより貞康が家をとく
ぶらふ。田長。冨文。頼祐。貞康。などの川のほとりまでおくりきぬ。酉
のさかりばかり舟岸につきて。慈延が家にいたる。それより下総
國海上郡銚子の里と。常陸國鹿嶋郡波崎とのあひだ。川のひろさ
十四町十間ばかりといへり。よりて銚子のくちとはいふなり。
廿六日晴。鶴堂和尚とぶらひきまたり。今日は八日市ざまへおも
むかんとてまうけをいそぐ。和尚。慈延。義旭。茂條。伊勢屋某。彦四郎条
川某。太兵衛などはかのところまでおくりきぬ。舟のいの目出度町の
河岸にきてぬれば。義旭ここより大田までとて。馬まうけておく
れり。貞康宗七などはまちとりかれど。わかれをつげていづ。本庄。
松岸。などいふは。遊女おほかる所なり。芝崎村に八幡宮ありかたへに

阿弥陀堂ありて。いとかるらなるところのさまにみゆ。三宅は和名抄
にみえたる郷の名なり。いまは屯倉ありし所なるべし。それより廣
野をゆけば塙新田なり。さがしき坂などのぼりくだりてまたおな
じみちをゆく。志みび坂といふ所より左の方一里ばかりに飯岡の濱みゆ。
玉崎明神の社ある處なり。鴨長明が家集に。
玉とみるみぎはが沖の浪間より立出る月のかげのさや
けさ」といふ歌の左注に。下総國にみさきといふ所あり。日本の東の
はてなれば。月の浪間よりいづるやうにてみゆるなりとあんや
ひと玉なるは此処のことなるべし。手長。綱戸。成田などいふ里をすぐ。
成田はところどころにおほかる名にて。そは登田のよしなるべし。ふり
の橋をまわりて。匝瑳郡大田にいたる。これ郷の名。和名抄にみえ

ゆ。日くれになれバ加瀬桐郷主が家にやどる。桐郷ハ日ごろ友市野迷
庵がとしごろのこころざしありといへり
廿七日晴。午の時ばかりここをすぐ。桐郷馬まうけておくれり。
井戸野といふ所に新川だしとてあり。未打さがるころ。八日市場
の里の土屋晋半兵衛がもとをとぶらふ。
廿八日晴。浅倉瑞雲。深田直正半右衛門などをとぶらひまうでく。瑞雲ハ薩摩人
なり。かの学ハさらに医をいとなめり。茶の湯をこのめり。直正ハ佐原の
里の永澤恭寛が子にて。深田氏のやしなひごとハなれるなり。中井敬義
谷文晁などに学びて書画に心よせふかし。夜にいりて積徳墓相
などおもせちく。あるじの晋かたりけらく。此里より西北の方二町ぞ
かりに。逆井八郎定胤が城のあとあり。そこにちかよびたる老尾村
に老尾神社あり。今ハ逆井大明神といふ。また曽我氏の家の又従
者洞三郎ハこの里人なり。また近どなりなる山桑村に鬼王氏な
るあり。これを鬼王とよぶ。曽我の又従者鬼王新左衛門といふ
の末なりしなり。その子孫の家に鬼王が虎御前よりゆづられ
しふるき鞍鐙をひめ持たり。また虎御前がかたみの衣と打
敷にせられたるが。八日市場の光圓寺にあり。また板碑四基あり。
そハ曽我十郎祐成。同五郎時致。大磯の長が女虎御前。化粧坂の
長が女少将御前。四人のおくつきおるしにて。鬼王が立たるなりとま
た山桑村の観音ハ。もと祐成が膚の守なりしを。虎御前につくる
御前より鬼王がゆづり得たるなりといへり。
廿九日晴。晋にぐしてその家の墓相をとみる。午打下るころここを

をとけぐ。昔むまゆうけてわくれり。妙見山とて。本立年ありてが
うがうしきれ社なり。そかしこれ国に妙見れ社わとかかるハ。千葉氏
れとおらつおや村岡與五郎良文。上野國群馬郡染谷川にて。相馬小次郎
将门と對陣せし時。そこれ花園れ里の七星山息災寺れ妙見の加
護をかうぶりしより。子孫とく〳〵ふかくたのみて。わのくにみ不
に社を立ていつきまつれりとなん。一里ばかりゆけバ香取郡飯
塚村なり。このあたり右のかたは。干潟新田とてひろ〴〵とみゆる
たまれれなる田面なり。世に日方八万石とよぶ。高名の新田なりけり。
さきれ日をされたる井戸野れ新川ハ。この田川尻にて。ほひたひらく
なり。さくりかよハしたるなりとぞ。未れ時バかり大寺れ里れ八本忠
嘉権兵衛家にいたる。忠嘉ハ千葉氏の後裔なり。申の時ばかり

忠嘉にぐして。そが家れ墓どころをとみる。
晦日朝明くもりたれど。やうく晴ゆくまゝに。西風はげしう吹
出ぬ。忠嘉にいとまをつげていづ。忠嘉馬まうけておくれり。四里ばかり
まうれ大神とふるとて。真木野村にいづ。佐原れ永澤久香が家に
いたれるハ手打かゝるころなるべし。とかうふし久保木某蔵之丞
たりしかバ。さし日れことれどかさり出ぬ。こハ竹窓れ老翁がすみか。
十一月朔日晴。平山忠則。田目井清。淡堂などゝもにひまうでく。千代貝
ふくろ。渡部好禮犀助がやどれる家をとぶらふ。好禮ハ津田徳
正信富めしれ社はうまうり人にて。もがな門人ごとしく升苦茶がちく父輔
なり。人〳〵のとゞむるをもおしてたちいでしハ未れなかばごろ
れるべし。久香。久穎。景命。忠則。清。伊能某政右衛門など舟路なれども餞

またもはなむけせり。酉のさがりばかりに橋向村にやどる。佐原屋
某がもとにやどる。ていさいつごろ根本世篤が訪ひまうけせし
家なり。

二日晴。朝まだき舟にのりて二里ばかり川をくだり。猿山の里の藤原
凌雷が家にいたりぬ。あるじの凌雷。椿千稔などまちとりて。いとよ
ろこびむかへはべりなどまうけせり。飯岡の里の神山奥連（三郎左衛門）と
いふひとまうでく。奥連は若きより学びに心をひそめ。歌口も
世におぼえ人に恥ぢずぞありける。日のくれがた冨士の嶺の西
のそらにみえそめたるに。暮の二日ばかりの月のかかれるさま。
かの画などよきかたらんがごとし
ただひとつふじのみえゆる大空にあたりて三日月の

るかりがね。

三日晴。人々にわかれをつげて成田ざまへいでたつ。千稔ぞしるべ
せり。東南の方一里許に名古屋（ナゴヤ）村あり。そこの助崎（スケサキ）といふ所に助
崎信濃守が城跡あり。信濃守は大須賀尾張守胤信が男にて。
千葉氏の親族なり。元弘のむかしのながされ人。尹大納言師賢卿
のはかなく消（キエ）たまひしところにて。今に古塚（フルヅカ）のこれりとなん。
滑川（ナメガハ）の観音は坂東廿八番の霊場なり。鐘の銘に。下総国香取郡
大須賀保内。滑河山龍正院。天和二歳癸亥四月廿六日と志るせり。本
尊は兼和のころ。小田宰相将治。常陸をとりつぎされしさかひ（境）なる
小田川（ヲダガハ）のはさが淵（フチ）よりとり出ていはひまつりし霊像なるよ
し。坂東観音霊場記九の巻にみゆ。大須賀村のそのかたへ（傍）に児（チゴ）

が塚あり。かたちのごとくなる鳥居おこりなかばくちそんじてた
てり。里人ハ兒(チゴ)大明神といふ。道興准后の廻国雑記に。ある少人(ワカキモノ)のは
へのためにうしなはれし由来(ゆらい)をあるして。白波にうき名を
ながしゝ兒(チゴ)の墓とよまれしハこれなりけり。埴生(ハニフ)郡水掛村(ミヅカケムラ)をへて。飯(イヒ)
岡村(ヲカノ)の神山奥連が家をとふ。庭にいとおもしろき延(はひ)松あ
り。来のさかりにこれをはぐ。奥連馬まうけておくれり。
やうやく日くれゆくに。まだついたちの月おぼつかなきころにて。
道いとくらしきをからうじて成田の里にたどりつきたり。かね
てハ大塚健(スグル)碩庵が家にやどるべくおもひつれど。このごろ病ありて
家にをらぬよし人のいへば。さてやみぬ。今宵ハ米屋といふなる
ごやとりやどりせり。

四日晴。不動堂のみあかしにまうづ。物のぞみある人の断食堂(ダンジキダウ)
にこもりゐたるおほかれど。いとおぞろしきばかりにおぼゆ。成木(ナルキ)新田
の里の大坂吉道(ノリミチ)とぶらひまうでく。猫名(ネコナ)新田の南行前(ミヤミユキチカ)佐次右衛門
か日ごろまちまゐらせてたなどいはれける。行前ハ吾黨の士康
建儀が親族にて。飯島猶勝とともに。としごろおなじくまじらひにつけて
歌よみしければ。むつまじくせし人なり。

五日晴。朝とく馬にのりてたつ。印幡郡酒々井(スヽイ)の宿をへてさかし
ゆけば。右のかたに将門山(マサカドヤマ)とてかれのなみなる山あり。うへに将門山
の神社あり。石鳥居の銘に。奉寄進将門山大明神石華表。兼徳
三甲午天十一月日。総州印幡郡佐倉城主従五位下堀田上野介紀朝
臣正信とあれり。里人のはなしに。こハ公津(コウヅ)村の百姓(タミ)惣五(ソウゴ)といへる

めの罪をまぬれしが。その霊(リヤウ)(祟)たゝりをなしゝゆゑ(故)に。神にまつられ
しなりといへり。また八幡宮と平親王の社とあり。平親王の社には
平親王将門明神と云扁額かゝれり。これ一(イチ)のふるき社にて。将門山
といふもこの社によれる名なりとぞ。佐倉の城は千葉康胤が子孫(スヱ)
代々のすみし城なりしが。千葉氏ほろびて(亡)。今は堀田氏の殿(トノ)(領)う
しろしたまへり。さくらといふ名は真谷(サクラ)の心にや。根小家(ネゴヤ)の里より
印旛沼(インバヌマ)ひろぐとみわたされぬ。廻国雑記にいなかのうみと云
れしはこれなり。臼井(ウスヰ)の宿に臼井六郎常康が城のあとあり。大
和田の宿をへて大野原にいたる。れいの小金。千葉などにつゞきたる
野なり。日くれはてゝ葛飾(カツシカ)郡船橋の宿にやどる。
六日晴。朝とくいづ。霜ふかうして雪ににたり。

ゆききのみちはしもみゆく道にあるくもたゆるその
船しる」行徳(ギヤウトク)の水驛(ミヅムマヤ)より。船にて太井(フトヰ)川を一里ばかりくだりて。
船堀(フナボリ)ざまへこぎたみ(漕廻)ゆく。中川の関。鎌屋堀(カマヤボリ)。小名木川(ヲナギガハ)。扇橋(アフギバシ)などへて。
深川のある橋よりより猪牙(チヨキ)船にうつりのる(乗)。さて隅田川を北
へ。神田川を西へ川のぼりて。未の時ばかりにさがみやの奄に
はやくつき(著)ぬ。

明治二十八年八月廿六日一讀過　醉園居士

鹿嶋日記終

かし庵のにきハ。さゆくおどれのもじはさびにおもふして。やがてかいやり
すてけるを。これごろやんごとなき御方より。おほせありて。おほう
たちあまたつどひぬ。まためのれが家となん。さうしてつみとりかなしとぞへ
てまいりたまはれむ。それもいなびがたくて。日記の末尾には
めでし侍るなり。されどもまだしのいとまなきみとのへしさされ
れむ。えらびいだすことはいとかたくなど。心にかゝりけるにあたかひてもにハ
まかせしなり。そが中にいとよしくことおもふ人のうたひとつなりは
漏しれるは何るべし。おのれやのかなしみを為るなん。

春

野若菜
とくやめらる素の袖とふりはへてきハ春のにすみれつむなり
江戸 長谷川宣昭

立春鶯
いとりやわ雪のふるえをとけいでゝ春のゆかしにうつるらん
常陸常陸原 松崎茂條

雪中鶯
なごとい へハおぼえひし谷の戸に打とけてむつうくひすの声
相模小船 船律牧朝

雪中聞鶯
のべ山もまだおしなべてふるゆきに来つゝもしらけふの鶯
江戸 山口定賢

ふる雪にまだやおそきとおもふらん何けハまた折とかうひ鶯の声
同 篠原資重

梅開曳客
そのあ本ゆくみてみえぬ雪の下にもさそはれやて鶯の来す
相模梅澤 藤巻寺実良

しらやとの梅ハ咲ぬとつけねとも風のたよりに人をまひくる
常陸鹿嶋 岡見信好

垂柳臨水
いとしかとわゆる柳のかけみえて下ゆく水のぬるみそめぬる
下総取手 澤近嶺

春月
老の身のなつしひとすれてさる月かれむとみしや衣の袖まん
江戸 橋本好秋

蛙
よもひくうすさくうきうけちく香ハ色ゆくまたとしむちまん
常陸常陸原 上山義旭

帰雁
春ごとに花の氣やおもうぬしんちるとをしとそかへるらね
相模沼代 林惟重

晴天帰雁
さくまれにおのひまつりて棹うはるけきそといぬるらかな
江戸 高田清年

関路帰雁
をけるにとまりしぬうりと空わるのうハのきゝはむおせゆるしなん
同 橋本好秋

糸桜　庭もせにさくいとさくらくる人をむすひとめなんものにもありけり　下総佐原 永澤久香

花　白雲のたつとはよそにみえながらたゝその花のさかりなりけり　常陸延方 小峰昌芳

こちぬ日ハ人にとはれてとはゝれ花ゆゑならぬ一もとの花さかや　江戸 瀧山知之

もろみつゝあくれはゝ花の咲たけハ世にありあみのとりところなる　相模曽我 中村祐兄

、さくらをまちくるとそらみて花にのみ心をとゝくひまはなかれ　江戸 源與清

朝花　小庵まけハ雪にまかひてさくら花けさはかりけり山かみそとし　武蔵府中 猿渡盛章

山家花　春もなほひさしくわのよそにてむかしかりぬさくら山さと　常陸上林 観音寺康武

花似雲　たつねきて風になひかぬかたひ心にそまて花かしらむ　源 與清

春舟　さしよするちかくのよみ泊舟なかのおもしろく春のくれかな　源 與清

夏

首夏月　しけりゆく庭の梢のひまをみてかなひ花さかり霊の月かけ

竹亭夏来　わかのよもまてむなしにゆひし風かよふなつとそきかれし竹林庵　武蔵府中 高谷朝遐

老後更衣　きのふにかはるかたちの衣ひとへのかみをもちあかてぬいなし　常陸太田 立川裕

ゑてかへるそのやしのかしとてに我れなかさへちなん哉　上山義旭

夜郭公　夏の夜ハみかやかたもんに夜ふかさかねてほとゝきす山なきおれ　橋本好秋

里郭公　さひしきもにかたゝるハなりにけるさらに里にとはれて竹　常陸太田 加藤豊子

夏浦月　浦のあまうすみなり夕ともなれ月にすまりうかゝりのろ徒　源 與清

五月雨　住のひろみをのゝ水かさそへていくぬかんさみたれの比　加藤豊子

さみたれの雲をと都にあまりの住ぬれていくかれ衣まれのなり　陸奥棚倉 林次長

日数つてふる水のゝ沢やのあまあやめよろぬさみたれのそら　同 永田忠意

水鶏橋風　うたねのとくれ夜のかせうしへ夕風かよふ水のたちなき　同 久保長秋

菖蒲露　たれもまくさ五月の玉かけやめくさひくなかとうら露てこおる　江戸 鈴木與叔

深更鵜川
ふけゆけはしらすからかゝり絶てやみにことゝはんうちの村きみ
常陸太田 小澤好音

瞿麦
うつくしき妹かかきねのなてしこはいはねといつもとこなつの花
同 冨永弘躬

閨中扇
手にならし扇の手たえ風すゝし秋やしらひてかはし枕に
同山方田 寶泉寺淳阿

江蛍
なにはえの波まにみえてほのかにもありかとひかりとふほたるかな
同土浦 路川信重

杜蝉
夜のまのはつせのかねに秋ちかきもりの木末のせみのなくらむ
武蔵府中 猿渡容盛

夕立
夜はれとらくに山はくもかくれてすそのはかゝるゆふたちの雨
常陸太田 中村茂喬

夕たちのさとはすきぬと旅人のよそにかゝるかけりそてる
江戸 上原建胤

野夕立
しかりとてやとるかたなき夕立にしはしもとむるやとりなきの
常陸太田 勝村八絃

蓮風
はちすはにまぬく音もよしの風にしたゝる小蓮の花ひらく
源 與清

樹陰流水
河しひその空もとのやとりひに木かけの清水流るゝしこ
立川格

いさゝかとよせくるみつるれてこゝろみ夏をわすれてそ山井のみ
常陸太田 皆川延恕

せくらそにうつれる枝はうゐみよ風すちるれ板下かけ
常陸太田 小澤信香

ほのみえしかけもしけみに秋さそはいそくる水の音の涼しさ
同 沼尻匡篤

夏虫
うちやすむ夜のを田にはむしのひかりのはつきのほたるなりける
橋本好秋

夏田
なかめにはくろかしみえし青苗て夕たちそゝぬあとのそよの田
源 與清

秋

田家初秋
はしめてそよく門田のいなすゑのゆふへに秋たちそしる
瀧山知之

夕されは風にそなひく穂の中に山田の庵に秋はきにけり
常陸土浦 神田道教

秋風
秋風はひとよのうちに音つれて夕さひしき小田のかり庵
寶泉寺淳阿

稲妻
山のはにほのかに光とみれはみせて月にさきたつよひの稲妻
石見濱田 河野正美

荻露
小夜風のふきわたる末に音かくくされてそよや庭の荻原
源 與清

路露
そてぬらすゆくへの露のさかり草くらふにぬるゝ旅のなか空

閑居月　よをすてし柴の門とはひらきて月はへだてぬよはの友かな　源 與清

さゝやかにさしいれはけちるちりより萩にやはに下れ月かげ

山家月　ほかはれにとふものとては山かげの風月とこやあれ柴のいほかれ　江戸 石田廣良

雲ふかきとよほしにやまれてよのつれをしめる月かげ　相模二宮 二見景敬

岡月　あさぢはらをかの庵の杉のさとさかぬにさしていつる月かげ　源 與清

関月　板ひさしまばらにかけはもれくれば月ともすまむ不破の関守

冥屋月　こゝろはれおもへともゆく月かげをとにのみてみるや関守　下総銚子 堀順孝

水中月　ほとひくる竹の丸橋をうけなめて月をひたせる奇の水舟　源 與清

旅宿月　草枕かりねのいほのまくらにてなかの月とはひやとりせり

月前擣衣　よなよなにかぬるはきぬたのおとにいかでか月をみるらむ　常陸江戸崎 小林元有

月前鐘　初瀬山をのへにひゞくかねの音に宿をとみするる秋のよの月　同土浦 櫻井有義

閨虫　ひとりねて夜にわすれそまさりける人まつ虫の鳴のまくら　江戸 都筑重雄

野径虫　きゝゆけはそれの露にすく虫の音のきこえけりの下のあな　河野正美

旅宿虫　旅まくらしきの枝の露をさすかりてなく鈴虫のこゑ　常陸太田 伊東道武

月　くもりなく八重のかすみてはれし鹿嶋の浦にすむる月影　同鹿嶋 塙則瓊

擣衣　からころもうちあまさむく成にけり秋もたけゆくはこの下庵　同 原田孝虎

里擣衣　里人のころもうつなりまさおさも家にたよりゆく家の玉川　篠原資重

聞鹿　鹿のねやとまるみちのあきなかにてたかぬるこの森の木の下　源 與清

山田鹿　わたるは山田のひたさみたれてかり庵ちかくさをしか鳴なり

擣聲幽　妻ちかし山あらしのほとはゆきをきへも聞さらし　江戸 宮本盈子

紅葉浅　からくれなゐの葉は色にいてぬ秋のいろし西の山口　源 與清

海邊紅葉　舟人は秋のなれとこきよするや紅葉いろこき山本の象

雨後紅葉　うちしくれてのちにさそらひぬさてはちられし家のもみちは　江戸 古澤知則

いかなれは一村雨のみちしはとをへのかたにはそめてゐるらん　同 中山爲子

山家秋夕　ふく風の音もさひしき夕なあはれみ山のむらの山への秋　同 渡辺弁芳

秋夕雨　秋とのへはものちかれはされまてさてにふりそふ夕くれの雨　武蔵府中 鹿嶋田盛常

冬

霜　さむけさの夜ころにおもしろき芝に霜とおもしていくすけめ　下総猿山 藤原陵留

庭朝霜　枯にそしまうれたる中白たへの松のかけみする庭の朝かな　観音寺康哉

橋上霜　うちわたる駒の河はしみゆるの野の中あるくなりけるかも　相模沼代 林惟重

河氷　いさなひし波のゆるみもみえぬまて末のくまひうち河の風　橋本好秋

泊千鳥　泊舟とまの雲とをるよの浦風さむくちとりなくなり

旅泊千鳥　よるくの浪枕にはねの松にをちなれてきく夜の友千鳥かな　石田廣良

冬山月　なかなみやひとしほさひしさえて雪にくもる山の端の月は　猿渡盛章

暁霰　本のまゝるそ明けの月のかけさえてくもるや霰のふれるなり　武蔵府中 福井真潔

大鷹狩　かりすれは雪のたのとふるの御狩にけすむまくらつれなら　常陸大船津 猿田知典

野雪　みし雪のふりしく今は人めさへかれ野の原に花咲にけり　江戸 和田緑子

河雪　日にとけぬちとは谷はむせとんもしらてくさも若の原雪　源 與倩

山家暁雪　冬ふかみ雪におもれる梢のはなる春かとならみやまへの庵　長谷川宣昭

猿朝雪　朝のふまてかかるさしまの猿人のゆきかひみ雪にふみまよふらん　江戸 竹内直躬

風前雪　吹おろしみやまのおろしに春まてて雪の華ちるみやまのさと　猿田知意

早梅似春　雪ふりし庭のまつもやかなるひらんとものにほふ梅のさくられ　伊東道武

閑居冬　ものうさに雪ふる庵のはひつてとむの花のいへのあはれにけり　源 與倩

折らく　雪のよやくれのなみたのかれとほかれにし人をとかなよそのろん　武蔵府中 相原亮泰

戀

逢戀　あふまでとたのむいのちもおしからで絶ねとおもふ心なになり　橘好秋

通不逢戀　おもなれて門さゝぬまでかよへどもなみだのみこそ袖にかゝれり　下総飯岡 神山奐達

深夜待戀　とりのねもきこゆるにつけてまつ宵の今はかひなしとおもひしらるれ　澤近鎮

忍思戀　岸植のいろにもみせぬ人をいつまで心にはしのびかねむつゝも　源與清

思高戀　およばぬ人を心にかくるもかひなきことを田面に袖ぬらしけるかな　加藤豊子

寄月戀　おもひわびねられぬ夜に[illegible]ひて月みやとひし小夜の手枕　陸奥[illegible] 常陸[illegible]

寄枕戀　ひとりねの枕にかゝるなみだかなよるにつれなき人の心を　中山[illegible]子

寄硯戀　[illegible]まだきひ硯のうみはあせにけりかきやるふみの数しつもれど　常陸太田 立川[illegible]子

まちわびていくたびみるなみだおもてはかゝやとふすぬるかな　源與清

寄琴變戀　おもふれどつれなきひとは琴のねのひきてかへるこゝろなりけり　加藤豊子

寄貝戀　おなじくはひろふ浪まに拾ひつゝあさましきかひはあらじ　鈴木與叔

寄橋戀　まちわたるかひもなきなれ岩橋のさえまなきこゝろ中の契は　常陸太田 二島嘉言

かつらきの久米ちの橋のなかたえておもひみてはうらみさめや　加藤豊子

秋夕戀　ねれちよ秋のゆふべの夕ぐれのすゞろに袖のぬれまさるかな　源與清

雜

曉海　いさりびの光もうすくなりにけり波とゆる[illegible]の曉のそら　藤[illegible]寛

村雨　[illegible]のくもは覚めし水にうつりぬるみそらにうつる村雨　常陸[illegible]奠玉

冨士山　白雲のうへにうかびてみえてきつる雪をまとふや富士のたかねなりけり　猿渡盛章

水聲似雨　村雨のふるかとばかりきこしは夜はさめてあらしの山のおと　澤[illegible]

山中瀧　[illegible]とらしとみ山のおくのたき心さへすゞしき瀧つせの音　常陸土浦 林閑大房

浦海　うきよをはなれてやすく浦にて漕出ぬらしあまの釣舟　江戸 上条[illegible]子

橋　紫人のかよふみちの九木橋さてもよるひるなにかけり　源與清

山家夏　けふ引れ[illegible]とかへりしらまほしき[illegible]る夏まつら紀橋　勝村八紘

山家経年　われとのみのぬくれかと[illegible]へてまけたくへつりる山はみ　伊東道武

旅宿　なきちりぬ人をなよりれいひ枕ら紀夏[illegible]ことはいさりけり　下総成田　大塚健

旅行る　日[illegible]行さき形原しけらく[illegible]雨に[illegible]とあるを指けるは　江戸　上条とし子

峯松　かさこゆる松か由紀やらしひになれて年ふる峯の松根　源與清

留　けけを紀をは[illegible]く年竹れ[illegible]とさかる門れ[illegible]みち　常陸磯辺　田辺信近

影　これ[illegible]のよまてうそひぬへ[illegible]清[illegible]けは　江戸　上条町子

南　[illegible]東[illegible]ひあて菜[illegible]くるれぬみのしけ山　源與清

貧士　ある[illegible]年月になるハあるのねかかる[illegible]紀

卒都婆　われんとつひにハかきたるそとハかきたするかれなれ人のそん　源與清

夏懐舊　なきさんとあきりの神の月うみかゝうれくありむ[illegible]

旅　ぬれてもれひ[illegible]ふみれ旅衣[illegible]るれへ[illegible]るる　江戸　鈴木基之

寄竹祝　かはらぬ[illegible]竹のねよのよに[illegible]れてよをいくさうや　二[illegible]

松屋高田先生著書

言壺抄 初篇 百巻 追刻
此書ハ和語のかぎりをあげて。古言古語を引證し。旧説をあげ。今按をくはへられ。何の注釈にも此書なり。本文ハ袖中抄にならひ。あるは類字の目録一通ずつ。国の韻府の体にせられたる目録一巻。また康熙字典の体に部類をわけられたる目録一通をそへられたれバ。和語活用自在なる大成の書なり。初篇も五巻十巻ずつつぎつぎ判行し。初編につくさゞるものハ編をつぎてまたくはへられんとなり。

俳諧歌論 二巻 判行
俳諧のいはれよりことくはしく論じて何くれのすがたをしるされしなり

竺志舟物語考注 二巻 同
村田春海翁の書れし物語に考注せられしなり

十六夜日記残月抄 三巻 同
阿仏尼此紀行に注釈なり

曾我日記 一巻 未刻
箱根のゆあみより相模国曾我中村の旧跡をとぶらひみられし紀行なり

擁書漫筆 四巻 判行
何くれの考に画をもそへられたる随筆也

相馬日記 四巻 同
武蔵秩父の郡より下総相馬内裏の旧跡それ国府のあとなどの紀行也

松屋叢話 二巻 同
何くれのすぢ考へられし随筆なり

墓相小言 一巻 同
墓所のゆゑよしをときあかされし書也

勧善録 三巻 同
忠孝身をたもつをすゝめられし教訓の書なり

楽章類語抄　十二冊　刊行
東遊歌。神楽歌。催馬楽歌。風俗歌。此真名本を校合し注釈せられしものなり

賀茂真淵翁家傳　一巻　同
古学の祖賀茂縣主真淵大人の行状をしるし肖像をもそへられたり

棟梁集　一巻　同
和文集にさまぐの考ありて文かく手則とすべきものなり

国鎮記　一巻　同
諸国の名をもて名づけし其由来を記されたり

積徳叢談　一巻　同
教訓のためなり奇古の善事をあつめて有善の事をしるされたり

吉野日記　二巻　未刻
甲州路より富士の吉田をへて。東海道。伊勢。大和を経て。吉野の花みて。木曽路をかへられし其紀行なり。

墓相或問　二巻　未刻
墓相の由来などを考証せられしものなり

鹿嶋日記　一巻　刊行
下総取手より。佐原。香取より。鹿嶋。銚子。太田。成田などの紀行なり

衣手日記　二巻　未刻
佐原。鹿嶋。水戸。太田。棚倉。白川。名くその。平潟。土浦。などめぐられし紀行なり

築井日記　一巻　同
武蔵玉川より相模の築井などめぐられしなり

玉川日記　一巻　同
武蔵世田谷。稲毛。影向寺。きた多摩新田などめぐられし紀行なり

松屋筆記　五十巻　写本
何くれのすさみにかゝれし随筆なり

東都
耕文堂　製本